第五　印度・ヨーロッパ諸國語

(一)

わが國語に多く入籍した外國語は、支那語についでは印度・ヨーロッパ語族の中の諸國語である。この諸國語の本家は、アジヤの西南部とヨーロッパとを占めてゐて、之を大別すると、アジヤではインド語派・イラン語派・アルメニヤ語派となり、ヨーロッパではギリシヤ語派・イタリヤ語派・ケルト語派・スラブ語派・ゲルマン語派などとなるのである。その中で、今までにわが國語に深い關係のあるのは、インド語派とイタリヤ語派とゲルマン語派である。

梵語の傳來

インド語派では、古代のインド語の一つである梵語が、欽明天皇の十三年（西暦五五二年）に佛教の傳來した頃から用ひられて、奈良朝の宣命にも「盧舍那」「菩薩」などがみえ、わが國の小說の始といはれる竹取物語にも、「天竺」「鉢」「賓頭留」「瑠璃」などがみえ、その後の國文學には、更に多く見えて居り、現代の口語にも「阿彌陀」「和尙」「金毘羅」「婆婆」「塔」「瓦」「僧」「檀那」「涅槃」「菩薩」「佛」「魔」「夜叉」「毘沙門」「羅漢」などが、普通に用ひられて居る。これらの梵語は支那で音譯され、佛教の傳來に伴なつて我が國へきたのである。

さてヨーロッパの諸國語の傳來は、梵語の傳來より凡そ一千年の後に始まつた。卽ち、室町時代の末から現代までに、イタリヤ語派ではポルトガル語やスペイン語やラテン語やフランス語やイタリヤ語が、ギリシヤ語派ではギリシヤ語が、ゲルマン語派ではオランダ語やイギリス語やドイツ語などが、追々と傳來した。

かの元の時代に支那にきてゐたマルコポーロが、「日本國（ジパングウ）」を西洋に紹介したことは、その後西洋と東洋との海上の交通を開くに至る導火線となつた。海上の交通が益々ひらけて、ポルトガル人が始めてわが國にきたのが、後奈良天皇の御代の天文十年卽ち西暦一五四一年である。さうしてスペインの宣教師が鹿兒島にきて耶蘇教を傳へたのが天文十九年で、それからキリスト教は九州から中國や畿内あたりへと弘まつた。文祿十一年卽ち西暦一五六八年、信長の保護を得て京都に南蠻寺が建てられたこと、天正十九年卽ち西暦一五九一年、キリストの傳記が國語に譯されたことなどを考へてみると、わが國語が西洋語に接觸したのは、可なり古いことで有る。

秀吉も家康も、内治のために耶蘇教を禁じ、さらに德川幕府は島原の亂にこりて鎖國政策をとり、外國人の渡來を禁じ、西洋人はオランダ人にかぎつて長崎にきて通商することを許した。八代將軍の時に洋書の禁制がゆるめられて、蘭學を修めてもよいことになり、

それから蘭學が追々と開けてきた。孝明天皇の御代の嘉永六年卽ち西曆一八五三年、西洋人の初渡來から三百十三年目に、米國の使節ペルリが浦賀にきて通商を請ひ、それから六年目の安政五年に、米國をはじめロシヤ・イギリス・オランダ・フランスとの通商の假條約が結ばれた。明治天皇の御代となつて後、めでたく西洋諸國その他と和親通商の條約が取結ばれて、西洋人との交際が益々親密となり、西洋諸國の語學が盛に行はれ、その種々の書物が盛に讀まれてゐる。

むかし支那において佛典を譯するのに、「極樂」「地獄」「餓鬼」「畜生」「意識」「念佛」「精進」の如き意譯法と、「佛」「菩薩」「伽藍」「塔」「奈落」「茶毘(ダビ)」の如き音譯法とを用ひた。わが國で西洋語を飜譯するのにも、やはり支那における佛典飜譯及び洋書飜譯の方法を用ひた。卽ち、「太陽系」「地球」「經度」「哲學」「科學」「立憲政體」「內閣」「議會」「社會」「權利」「義務」「銀婚」などの如き意譯法と、「クリスマス」「カルタ」「トンネル」「ビヤノ」「オルガン」「ビルディング」「フィルム」「ラジオ」などの如き音譯法とを用ひてゐる。

諸國語傳來の先後

（二）

およそ幕末をさかひとして見ると、その前に傳播した音譯の西洋語は、多くはポルトガル語（パン・シャボン・カナキン・ランビキなど）、スペイン語（カッパ・メリヤス・メリンスな

西洋語の同

ど)、及びオランダ語(サーベル・コンパス・ギヤマン・ドンタクなど)で、その中でもオランダ語が最も多かつた。その後に傳播したのは、多くはイギリス語(ランプ・フランネル・ガラス・ペン・シャツ・ハンケチ・トンネル・マイル・ボーイなど)、フランス語(シャッポ・シャンパン・メートルなど)、及びドイツ語(カイゼル・ガーゼ・メスなど)で、その中でもイギリス語が最も多い。また西洋語の舊いのと新らしいのとの交替もある。例へば、

ビードロ(ポルトガル語)=ギヤマン(蘭語)=ガラス(英語)

カッペル(蘭語)=ストーブ(英語)

バッテーラ(ポルトガル語)=ボート(英語)

の如きである。さうして明治元年から今まで凡そ數十年が間に採用した西洋語は、西洋人の初渡來から慶應三年まで三百二十七年が間に採用した西洋語よりは遙かに多い。これは實に鎖國退嬰の政策と開國進取の國是との然らしめた所である。しかし現代文に用ひてゐる音譯の西洋語は、今までには、まだ澤山にはない。いはゞ、竹取物語や伊勢物語や土佐日記などに見える漢語の程度位なものであらう。

既に開國進取を國是として西洋諸國との交通が甚だ盛となつた現代以後に、西洋の諸國語が益々多く我が國語の中に採用されるのは、當然の事である。ついては、この後は、な

るべく漢語譯をさしひかへて西洋語を音譯することが望ましい。なぜかといふに、新に外來の事物や思想をあらはす言葉を加へる場合には、內外ともに通じやすい世界的の言葉を採用するのが便利であるからである。漢語が日本語に同化されたやうに、音譯の西洋語もよく日本語に同化される。今までに採用した所で見ても、すべて工合がよい。さうして音譯の西洋語を同化する語法上の狀態は、前に述べた漢語の場合とほゞ同じである。先づその名詞が容易く採用される。動詞としては、「スケッチする」「ハイカラぶる」の如く、之を佐行變格又は接尾語につゞけて用ひる。漢語の「料理」を「れうる」と云ふやうに、西洋語の「ハイカラ」を「ハイカル」と語尾を活用させて云ふが如き例は、甚だ少い。形容詞としては、西洋語を助動詞または接尾語でうけて、「スウィートなる家庭」「ゼントルマンらしい人」などと云ふ。副詞としては、西洋語を助詞もしくは接尾語でうけて、「サブライムに見える」「五マイルづつ行く」などと云ふ。

漢語譯ではピストルを「短銃」、ボイコットを「非買同盟」、カテゴリーを「範疇」といふやうに、原語の意味をあらはすに却て不便なことが有る。その不便とは、譯し方が適切でないことや、或は漢字の舊來の意味に引きつけられて誤解がおこることや、或は同音異義の漢語の衝突を增すことやである。

またよく日本化された西洋語は、漢語譯よりは却てよく本來の日本語に調和する感じがある。即ち、ペストと「黑死病」、ホテルと「旅館」の如きである。歌詞としての西洋語も中々よい。

武藏の海さしいづる月は天飛ぶや
　カリホルニヤに殘る影かも　（佐久間象山）

昨日あひ今日別れてもテレグラフ
　待つとし聞かば今歸りこむ　（童戲百人一首）

などと云ふ歌の中の西洋語は、滑らかに感ぜられる。テレグラフは「電信機（でんしんき）」より好いでは無いか。また俳句の方でも、

若草にテニスの綱のかすみかな　（四　丁）
フランシスの說教も聞かず囀るか　（和　風）
八人の子供むつまじクリスマス　（子　規）

など中々よい。テニスを「庭球（ていきう）」、「クリスマス」を「聖誕祭（せいたんさい）」と漢譯するなどは、却てまづい。

我等は現代に於ける二重生活の不經濟を除く樣にしたい。西洋語の新漢語譯も二重仕事である。日用語にも工合よく音譯の西洋語が用ひられつゝ有るから、學術語には尙更その直輸入の門戸をひらきたい。あまり漢語の鑄型に入れて之を譯したくない。われらの祖先

が、數多の漢語を採用して國語の富を增し、その運用を自在にした態度を、西洋語の方にも取りたい。しかし漢語の濫用を戒めたからには、西洋語の濫用をも戒めなくてはならぬ。

西洋語の書き方

（三）

なほ漢字假名併用文における西洋語の書き方を改めて行きたい。その一つに、西洋語を音譯しながら漢字で之を意譯しない事。例へばメリヤスを「莫大小」と書き、その伸び縮みが自在で大小がないといふ意味をもたせる類である。これは「今造」を「あたらし」、「向北」を「みなみ」と讀ませる萬葉用字の流であり、實に面倒な謎で日用に適しないから、改めるが可い。この類をあげてみると、ランプを「洋燈」、ピアノを「洋琴」、ビールを「麥酒」、マッチを「燐寸」、ボタンを「扣紐」、インキを「墨汁」と書くなど、皆さうである。その二つに、支那で音譯した漢字を成るだけ國語に用ひない事。これは、その漢字を讀むのが困難なばかりでなく、支那音で讀んでも、到底支那なまりの西洋語に過ぎないからで有る。例へば「華盛東」は Hwa-sheng-tung,「拿破侖」は Na-p'o-lun と北京音で讀むが如きである。その三つに、日本流の假借漢字よりは假名を用ひる事。例へば「歌留多」はカルタ、「嘉壽天以羅」はカステイラ、「金巾」はカナキン、「蘭引」はランビキと書くのが可い。かやうに云ふのは、西洋語を書きよく讀みよくするためである。西洋語の假名書きは、凡そ漢字書きより

字數は增すのであるが、假字書きの方は讀みよく、そのうへ字畫の減る利益は、字數の增す損失を償つて餘りがある。

しかし漢字假名併用文には漢語が入り易い。漢字と漢語とは親密である。「石鹼」「墨汁」「鋼筆」と書けば、セキケン・ボクジフ・カウヒツと讀まれ、シャボン・インキ・ペンとは讀みにくい。漢語を程よくし、西洋語などを程よく取入れるのには、表音文字で書くのが最もよい。近來の新聞や雜誌などの漢字假名併用文には、音譯の西洋語は大概片假名で記されてゐる。